

グリーン・ピックス

No.65

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 森林研究本部 林業試験場

和紙文化の継承を支える道産ノリウツギ

日本最古の和歌集「万葉集」にも詠まれているアジサイ属の植物は、北海道から九州へ至る広い範囲に分布しています。これらは古くから観賞用(紫陽花 アジサイ)や甘味料(甘茶 あまちゃ)など、多様な用途で暮らしに取り入れられました。道民にはアイヌ語に由来する「サビタ」の呼称で馴染みのあるノリウツギ(糊空木、学名: *Hydrangea paniculate*)は、各地の和紙産地において手漉き和紙の原料植物として利用されてきました(写真-1)。花が咲く頃7-8月に採れる内樹皮から抽出する粘液は「ねり」と呼ばれる抄紙用粘剤になります(写真-2、3)。糊空木の「糊」は、この粘液の性状を表しています。

紙漉きの工程は、①紙の素材になる植物(紙料植物: コウゾ、ミツマタ、ガンピなど)から繊維を解きほぐし、②紙漉槽(水槽)へ繊維と水、「ねり」を入れ、③繊維を水中に分散させて、水ごと簀桁(すけた)ですくって縦横にゆらし、紙を漉きます(写真-4)。この工程において、「ねり」を加えた水は粘りを帯びることから、繊維は水中に沈むことなく、紙漉槽にむらなく分散します。そして、漉いた紙層から粘度を帯びた水がゆっくりと抜ける過程で繊維は並び、均等に広がります。また、「ねり」の粘性は時間が経過すると減退することから、漉いたばかりの湿紙を重ねてもくっつくことはありません。

本道に自生するノリウツギの「ねり」の品質は和紙職人から高く評価されており、この「ねり」で漉かれる和紙は書跡や絵画等の文化財の修復に欠かすことができません。明治時代以降、北海道はノリウツギ樹皮の供給地として、和紙文化の継承に重要な役割を果たしてきました。しかし、ノリウツギの自生地ではエゾシカの樹皮剥ぎ被害の拡大や進む過疎化に直面しており、先行きは不透明です。このことから、林業試験場は関係機関と連携して、栽培技術の開発と樹皮の安定供給の実現に取り組んでいます。

(樹木利用 G 錦織正智)



写真-1 ノリウツギの開花(7月)



写真-2 樹皮の採取



写真-3 内樹皮を叩解して抽出した「ねり」



写真-4 紙漉き
吉野手漉き和紙 福西和紙本舗 HP より